



国際親善ニュース

第 8 号

昭和57年3月31日発行
金沢市都市提携委員会
事務局：金沢市総務部総務課
国際親善係 TEL 20-2075

您好！ 蘇州

○熱烈歓迎!! 蘇州市友好代表団一行調印のため来訪

意願の金沢・蘇州両市の友好都市提携の調印が56年6月13日午前金沢市庁舎内において厳かに挙行された。6月5日尾戸助役の出迎える中、大阪空港に到着した蘇州市友好代表団一行7名は大阪府池田市との調印後東京参観を終えて12日午前雨の小松空港に到着。空港では、江川市長、吉田都市提携委員会会長はじめ市幹部、日中友好関係者多数が出迎え、堅い握手を交わし一路金沢へ向かった。一行は方明蘇州市長、石琪副市长ら7名。午前10時45分金沢市役所に到着、市職員から盛大な歓迎を受け、市消防音楽隊が「祝典行進曲」を演奏するなか、ミス百万石3人から方明市長らに花束が贈呈され



た。引き続き、市長応接室で歓談した。同日夕、一行は市民歓迎パーティに出席、会場を埋めた多数の市民の熱烈歓迎を受け、江川市長から「獅子頭」、方明市長から「鶴の刺繍」（額入り）が互いに交換され、友好に花を咲かせた。13日午前10時、最大の行事である両市の友好都市提携調印式がとり行われた。式典には、蘇州市友好代表団一行7名、金沢市側から江川市長、吉田本会会長、尾戸助役ら市幹部、来賓として符浩駐日中国大使、中西石川県知事、宮太郎金沢商工会議所会頭、徳田与吉郎蘇州・金沢友好都市提携促進委員会会長らが出席した。両国国歌演奏のあと、「両市市民の友好往來を強化し、相互理解を深め広範な交流と相互協力を深める」との議定書に調印、交換した。正式に友好都市になった瞬間である。江川市長は「今後あらゆる面での交流を通じ、子々孫々々々代々に至るまで友好を深めたい」と述べ、これに対し方明市長は「蘇州、金沢両市はともに共通部分が多く、今後さらに友好親善を深め世界平和に貢献したい」と答えた。これに基づき、児童書画の交換、農業研修生の受入れ等盛り沢山の交流計画を協議、合意に達した。調印という大きな任務を果たした訪問団一行はいよいよ友好ムード一色に染まった恒例の第30回「百万石まつり」に参加。先ず13日夕、市庁舎前の答礼台に上った一行は江川市長らと共に、1万人を越す子供達の提燈行列に応え、「蘇州市万才」の熱気あふれる叫びに感激した。また14日は最大の催しである「百万石パレード」に参加。オープンカーで江川市長とパレードの先頭に立った方明市長は終始にこやかに35万人を越す沿道の市民に初々しく手を振り、盛んな拍手を受け、友好ムードは最高潮に達した。滞在中一行は、記念植樹を行い、折から開催中の蘇州市写真展を見学、また兼六園、「能」、マーケット、学校、工場、病院、保育所等を参観して、17日金沢市長らの見守るなか小松駅から名古屋に向った。この後、愛知県庁、綾部市、亀岡市（ともに京都府）を順次訪問、20日12時40分大阪空港から帰国の途についた。（写真上は、調印風景、写真中は代表団一行）

日本国金沢市と中華人民共和国蘇州市との友好都市締結議定書

日本国金沢市と中華人民共和国蘇州市は、両国国民の友好関係を広範に深く発展させるために、両国間の平和友好条約の原則と精神にのっとり、友好都市締結を決定する。

双方は正式な友好都市の提携を新しい起点とし、日中両国国民の伝統的な友誼とすでに行なわれている友好協力関係を基礎として、両市市民間の友好往來を一層強化し、絶えず相互理解を深め、われわれ両市市民の友誼を増進させ、農業、工業、貿易、科学技術、文化、医学、教育、体育等各分野において、多様な形式をもって、広範な交流と相互協力を進め、双方の経済、文化等各項の事業の発展を促進し、日中両国国民が世代代友好的につきあつてゆくために積極的な貢献をする。

本議定書は、両市長の調印の日から効力を生ずる。

1981年6月13日

金沢市長 江川 蘇州市長 方明

盛りあがる国際交流

○金沢市友好代表団、蘇州市答礼訪問



56年11月8日から15日まで、江川市長、吉田都市提携委員会長を代表に一行7名から成る本市友好代表団が蘇州市を答礼訪問した。これは6月に調印のため来沢した蘇州市友好代表団に応えたものである。8日午後、蘇州市に着いた一行は多数の市民から熱烈歓迎を受け、市役所に方明市長を表敬、方市長は「わが家に帰ったつもりで楽しんで下さい」と一行をねぎらい、再会を喜び合った。9日は蘇州市長自ら案内を買って出、江蘇刺繡研究所、寒山寺等を見学、夜は蘇州飯店で市民歓迎パーティに臨み600名近い市民から盛大な歓迎を受け友好を深めた。10日は人民公社、虎丘等見学、東園で記念植樹後、両市の代表は今後の交流計画について歓談、盛り沢山の交流計画を協議した。蘇州市訪問期間中、江川市長と吉田会長には国賓クラス用の中国の最高級車「紅旗」が充てられ、至る所で市民から熱烈な歓迎を受けた。11日からは蘇州を後に江蘇省人民政府、中日友好協会、北京市人民政府、中国国貿促進委員会、上海市人民政府を順次表敬訪問して、15日午後帰国の途についた。(写真は記念植樹の石碑除幕式)

○ゲント市助役夫妻金沢を親善訪問



ゲント市(ベルギー)のモレーウ助役夫妻が56年10月27日から同月30日まで本市を訪問した。55年4月、江川市長一行がゲント市を親善訪問した際の招請に応じて初来日したもので、昭和46年の姉妹都市提携以来、姉妹都市担当助役として両市の友好交流に尽力してきたモレーウ助役が、この記念すべき提携10周年の折に、金沢を親善訪問したことは意義深いものである。モレーウ助役夫妻は、27日金沢駅頭に江川市長、吉田都市提携委員会々長(市議会議長)らの出迎えを受け、同日夕の歓迎パーティーに臨んだ。ゲントにおいて10年間、数多くの金沢市民を受け入れてきたモレーウ助役は、パーティーの席上で、既に旧交のある多くの市民と再会を喜びあった。28日以後、金沢市長表敬訪問、ベルギー庭園での記念植樹など、市民との交流や、市内見学に友好親善の重責を果たし、30日午後、金沢を発った。(写真は江川市長から記念品を手渡されるモレーウ助役)

○イルクーツクから男子バレーボール団来沢



56年10月25日から29日までイルクーツク市から男子バレーボール選手団(団長シヴィルスカヤ・パレンチーナ女史)一行15名が来沢した。一行は飛行機の欠航で到着が1日延びたものの元気で、25日午後1時過ぎ、中川三津夫市収入役らが出迎える中、金沢駅に到着、さっそく宿舎に向かった。同日夕、市民歓迎パーティーに臨みイ市にゆかりのある市民多数と歓談し友好交流の実を挙げた。26日午前、市役所に江川市長、吉田議長、尾戸助役を表敬、堅い握手を交わして今後の友好交流について懇談した。引き続き中西県知事表敬訪問、北日本紡績、県立武道館視察、ロシア人墓地参拝、日ソ協会県連訪問等を行った。27日午前市中央体育館で練習、午後5時から本市の3チームと親善試合を行った。試合終了後、宿舎のホテルに対戦チーム全員を招き友情の交歓に花を咲かせた。28日森根上町長を訪問、同日夕サヨナラ夕食会で焼き焼を囲んで日本の味を堪能、翌29日午後、江川市長、吉田議長らの見送る中新潟へ向かい、30日午後帰国した。(写真は駅頭での歓迎風景)

○加賀宝生、ゲントで幽玄の世界を披露



加賀宝生ゲント市友好訪問団一行が56年11月6日夕、ゲント市の王立オランダ語劇場において、友好親善能を催した。これは金沢市とゲント市(ベルギー)の姉妹都市提携10周年記念事業で、金沢能楽会の精鋭能楽師、囃託、門弟ら34名による能「羽衣」、「石橋」、舞獅子一番、仕舞五番、連吟一番が上演され、能の持つ幽玄の世界が、会場を埋め尽くした観衆を魅了した。東洋の神秘「能」に対する市民の反響は予想以上に大きく、鑑賞券は発売と同時に売り切れとなり、上演日当日も、開演20分前には満席となる盛況ぶりであった。公演にはドウ・ハーブ市長、10月に来沢したモレーウ助役らゲント市関係者をはじめ、在ベルギー日本大使館徳久茂特命全権大使の姿も見られた。出演者全員による連吟「高砂」が始まると、観衆の目と耳は完全に舞台にクギ付け、切り能の「石橋」が終わると同時に、アンコールを求める拍手が会場に響いた。この後一行は在ベルギー日本大使公邸において能二番を披露。日本の伝統文化の一端を紹介し、日本・ベルギー両国民、金沢・ゲント両市民の心と心をつなぐ友好の掛け橋の任を果たした。(写真は歓迎セレブションでの一コマ)

○第10回金沢市青少年代表海外派遣団蘇州を訪問



過去本市の姉妹都市、東南アジアを訪問、各国の青少年と親善交歓し、青少年の国際的視野を広め、国際協力の精神を涵養するなど国際性を啓発してきた同団は今年で10回目を迎え、友好都市となつたばかりの中国蘇州市を提携調印祝福の意も込め訪問することとなった。一行は清谷忠良市教育委員会副理事を団長とする本市の青少年で構成される15名で、56年8月11日から20日まで蘇州市をはじめ中国各地を親善訪問した。同団の訪問は金沢と蘇州が正式に友好都市締結後初の公式訪問となり、15日午前市役所に方明市長を表敬訪問、金沢市長のメッセージを手渡し、親善交流に貢献した。15、16日市内見学した後、16日夕刻より地元青少年200人と交歓会を持ち、「花笠踊り」、「炭坑節踊り」の輪に蘇州市の青少年も加わり友好を深め、北京、上海を訪問して19日帰国、20日金沢に戻った。同訪問団の外、調印後本市から蘇州市を訪問した団体は8団体もあり、民間交流を通じて両市の友好促進に貢献した。(写真は方明市長と記念撮影する一行)

○イルクーツク市長、本市を親善訪問



56年5月27、28の両日、イルクーツク市(ソビエト)のグロモビッチ市長が本市を訪問した。同月25、26日、山形県酒田市で開かれた日ソ沿岸市長会議に出席し、金沢に立ち寄ったもので、同市長の来沢は一昨年に続いて2度目で、27日金沢駅頭で江川市長らの出迎えを受けた。引き続き金沢市役所で当面の交流計画に関する討議に移り、バレーボールチームの相互派遣など文化・教育等各分野における計画を確認し合った。グロモビッチ市長は28日、武蔵町の視聴覚センター等を見学の後、同日午後新潟に向かった。(写真は再会を喜び合う両市長)

○ナンシーのトウエスニー夫妻、江川市長と喜びの再会



55年4月、江川市長一行がナンシー市（フランス）を親善訪問した際、同市の日本風飾り付けコンテストで江川市長の審査により1位に選ばれたマドレーヌ・トウエスニーさんが御主人のシルバンさんと来日し、56年8月5日から7日まで金沢に滞在した。マドレーヌさんはナンシー市で洋装店を経営しており、今回はバカンスを利用して観光旅行団のメンバーとして来日、観光の合間を縫って金沢を訪れたものである。8月6日江川市長と再会したマドレーヌさんは日本の素晴らしさに感激した面持ちで、和やかにナンシーでの思い出話を花を咲かせた。この後トウエスニー夫妻は兼六園の散策など金沢情緒をたっぷり味わい、茶道、日舞など日本の伝統に触れた。（写真は日本の味を賞味する夫妻）

○本市バレーボール団イルワーツフで親善試合



金沢市選抜男子バレーボール選手団（団長中川三津夫市収入役）一行15名は56年8月21日から28日までイルワーツフを親善訪問した。一行は20日金沢を出発、21日/バロフスク経由で22日イルワーツフに到着、同日午前市役所にグロモヴィッチ市長を表敬、23日と26日訪問の第1目的である親善試合を各1試合ずつ行った。25日は有名なバイカル湖遊覧、同タスポーツキャンプ場で交歓会、また翌26日晚イルワーツフ市執行委員会主催の晩餐会で大歓迎を受け、大いに両市の友好親善に貢献した。さらに滞在中発電所、博物館、ソ日協会、日本人墓地、郷土誌民俗館等を訪問、27日午後イルワーツフを後に/バロフスク経由で28日午後新潟空港に到着、29日11時30分金沢に帰った。（写真は市長室での一こま）

○バファロからガン研究科学者来訪



56年8月5日バファロのロスウェル記念研究所のガン研究科学者ウィリアム・グレコ博士（29才）が来沢。同氏は柔道、日本料理に特に興味を持ち、柔道は初段の腕前。本市で柔道をやってみたいとの希望に、市内の道場で柔道を楽しんだ。到着をわざわざ携えて来ただけあって、「さすが本場の柔道は強い」と誉めながらも大内外刈の技は鋭いものがあった。22才の時から柔道を始め週2回夫婦でバファロの道場に通っているという柔道愛好家である。また日本食にも目が無く、寿司、天ぷら、醤油、味噌が大のお気に入り。金沢滞在中は日本料理の味を堪能した。同氏は5日江川市長を表敬した後、このほか県立武道館、兼六園などを見学、7日京都に向け出発、13日帰国まで日本各地を旅行した。（写真はホーム・ステイを楽しむグレコ博士）

○第7回姉妹都市フェア開催



本会主催の「金沢姉妹都市フェア」が名鉄丸越百貨店8階を会場に56年9月18日から23日まで開催された。今年は新しく友好都市に加わった中国蘇州市がとりわけ市民の関心を集めた。また市消防音楽隊とバトントワーズによる市中音楽パレードは20日（日）午後市庁舎前から丸越まで賑やかに行われ強く市民にアピールした。本年は第7回目にあたり「もの、ことば、こころ」をテーマに各姉妹都市の児童画を主体として各都市の大型イラストマップも展示し

た。特に蘇州市コーナーは見事な児童画をはじめ蘇州市風景写真に人気が集まった。本年は姉妹都市親善交流の基本に戻り、テーマが示すごとく、ものを介しことばを交しところを通ずる精神的効果を狙いとした。（写真は市中パレードから）

○田中さん、ナンシー市派遣交換留学生に



ナンシー市派遣第5回金沢市交換留学生に、金沢美術工芸大学で油絵を専攻している田中都紀さん（20才）が決定した。女性留学生の派遣はこの制度が始まって以来今回が初めてで、56年10月から57年9月まで、ナンシー美術学校で油絵を勉強する。金沢・ナンシー間の交換留学生制度は昭和48年に創設され、金沢からの派遣は田中さんと5人目。今回は13人の応募があり、書類審査と面接選考の結果田中さんに決定した。田中さんは、空手初段、ピアノもたしなむという多才なお嬢さん。新しいナンシーでの生活に胸をふくらませ、56年10月フランスに向かった。

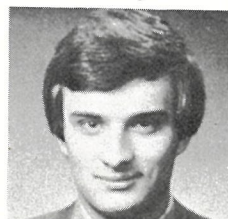
○米国姉妹都市訪問ラリー、バファロ市へ

56年9月10日から19日まで本市の報道関係者2名と読者代表1名から成る一行3名がバファロの親善訪問をはじめ、ロスアンゼルス、ニューオーリンズ、ニューヨーク等アメリカ各都市の取材旅行に出発した。14日/バ市入りした一行はバファロ市ロータリー金沢委員長で花屋を営んでいるウィリアム・カスティング氏に出迎えられ、滞在中仕事そっちのけの世話を受けて旅の疲れを癒した。また、今日の両市の姉妹関係の基礎を築いたアルバート・クーパー氏とも夕食を共にし両市の友好の話に花を咲かせた。一行はバファロ滞在中、ナイアガラの滝等を見学、16日同市を離れニューヨークに向かい、19日帰国した。

○'81石川青年の翼、гентトを訪問

'81石川青年の翼一行40名は56年10月30、31の両日гентト市を訪問し、地元の青少年と友好を深めた。10月30日、パリからгентト入りした一行は、宿舎のホテルでгентト市関係者らの出迎えを受け、гентト市役所を表敬訪問した。一行はその後、гентト市庁舎、カント城、聖/バ教会など今なお中世の雰囲気を残す市内各所を見学。長い歴史を誇るヨーロッパの伝統を堪能した。同日夕、一行はホテルにгентトの青少年を招待し、日本民謡、書道など日本の伝統を披露した。若者同士夜が更けるまで話が尽きず、国籍を越え理解を深めた。翌31日、一行は心温まる思い出を胸に、ブリュッセルに向けгентトを発った。

○バファロから金沢大学へ留学生来訪



留学が決まったのはニューヨーク州立バファロ大学2年生ジョン・ウォレンタ君（19才）で、昭和54年7月から1年間桜丘高校にロータリークラブの交換留学生として来沢したことがあり、日本語はかなりうまい。同君は今回世界的組織をもつロータリー財団の奨学金を獲得、金沢大学への留学を指定された。同大学への留学は文学部史学科に籍を置くことになるが、期間については概ね57年10月から来年6月までとなる見込み。本年7月に日本に到着し東京の国際キリスト教大学の日本語夏期集中講座に出席した後、金沢に来訪する予定。

○ポルト・アレグレ総領事離任

金沢市とポルト・アレグレ両市の親善交流に昭和54年3月着任以来貢献されてきた吉水通在ポルト・アレグレ総領事は56年7月8日付けて離任、前メキシコ大使館参事官新村得也氏が新しく赴任した。両市の関係はこれまで言語の意志疎通の問題もあり、昭和42年の姉妹都市提携以来、元ポルト・アレグレ総領事佐藤氏から現在まで当地の総領事の協力を得て交流が推進されてきただけに、総領事の交替は本市にとっても関心事となっている。

◆◆◆プロフィール◆◆◆

一 金沢での生活を振り返って一



東南アジア留学生 陳 恕樸

金沢へ来たのは今から4年前のことです。そして今、春を待ちかねて金沢を飛び立とうとしています。金沢は城下町なのでのんびりして、住みやすい所だと思います。ただもう少し気候がよければ…。金沢へ来た当時、友人

が1人もいませんでしたが、金沢市東南アジア留学生受入制度の適用者として受け入れられたので、関係の人々に色々とお世話になりました。これからこの制度をもっと改善して続けてほしいと思います。三月で金沢での学生生活が終了します。今振り返ってみると、もっと色々なことをするべきだったと後悔しています。親友ができなかつたので、時々自分を見失ったこともあります。狭い人間関係の中で、いつの間にか自分も気短い人になってしまう気がします。でも金沢人は、割合やさしいと思います。最近、金沢も少しずつ国際化されて来ました。日本が厳しい条件の中に置かれているので、城下町の金沢さえも国際問題を取り込み始めています。本当に感心します。しかしいつも言われているように心と心が語り合わなければ、真のコミュニケーションができません。ところで、世界はいくら狭くなくても、民族と民族、人間と人間の間に見えない壁がいつまでも存在しています。神様はなぜ私達をこのように不思議な人間に創造したのでしょうか。人間は精一杯生きているのに、なぜお互いに恨み合い、殺し合うことになるのでしょうか。そして、人間の愛は私達の体の中にどのように存在するのでしょうか。静かに降る窓の雪を見ながら、真冬の夜、私は4年間の留学生生活を一通り振り返ってみました。悲しかったが嬉しかったかわかりません。ただなんとなく人生は不思議だなあ、どうして私はここにいるのだろうかと思っています。では、金沢の皆さん、本当にありがとうございます。いつか旭が昇る時に……。

○交流の場に若い芽を！

金沢を世界へひらく市民の会事務局長 松田 園子



「гент市での能楽公演がとても喜ばれた」と、渡辺容之助師より伺った時は、心から嬉しかった。東京駐在ライフ特派員ジェーン・コンドンさんはアメリカ東部田舎町のおばさんから、「トヨタ、ソニーの国に行かれていいですね」と言われたという。今後の課題は、伝統芸術と最先端技術とのギャップ、つまり現在の日本人が何を考え、どう暮しているか我々の行動の規範を理解してもらうことであろう。大変心強いのは、「市民の会」へ未知の若い人達からの手紙や電話が飛び込んでくることだ。「ぜひ金沢を世界へ紹介するお手伝いを」と、目を輝かす若い人たち。金沢の将来が明るく思えてくる。意欲ある人達に出来るかぎり向上の場を与えてあげたい。幸い金沢は沢山の姉妹都市を通して世界へ開かれている。さまざまな交流の場でこの人達を登用し（例えば、行事ごとに試験で通訳、ガイドを採用するなど）、将来の金沢の宝として育てていただきたいと切に願っている。

○蘇州市答礼訪問を終えて

金沢市議会議員・金沢市都市提携委員会会長 吉田 勉



姉妹都市中国の蘇州市を答礼訪問のため、我々金沢市友好代表団一行7人は、昨年11月8日から15日までの8日間の日程で、蘇州市を中心に南京、北京、上海と各市を訪問。行く先々で熱烈的な歓迎を受け、さらに友存のきずなを深めた。各市、人民政府の表敬訪問、市内の施設や観光地巡りも加え、市民との親善交流も深め今回の旅でいくつかの交流計画も確認され、各地で姉妹都市の使者としての大きな成果を挙げた。以下は、その訪問記である。11月8日午後1時5分、大阪空港から上海空港に着陸した。

我々一行を温く迎えたメンバーは、さきの調印式に来沢した石垣副市長、呉増璞外事弁公室主任、通訳の張学同室科員ら懐かしい顔ぶれである。笑い崩れるような、ニコニコした顔々、両手で包み込むような固い握手を交しながら、中国の最高級車「紅旗」で上海空港を後にした。上海から蘇州までは車で約2時間30分、交通量はいたって少なく、勢い自動車は道路の真中を走ることになり、車は王様の感がある。道路の両側は、走っても走っても山はなく広々とした田畑である。広い国土を実際の目で確かめ合い、改めて感心した。市街地に近づくにつれ、人と自転車の数はいよいよ増えて、川の流れを連想させる。街の中心部は、まだ古い街並みが多く宿舎に向う途中、代表団歓迎の横断幕や色とりどりの旗が飾られ、道路には水が打たれており蘇州市民がいかに代表団を歓迎しているのかわかって驚かされた。宿舎の南園賓館に着くと、まずドラ、カネ太鼓の鳴物に驚かされた。懐かしい方明市長らが門前まで出迎え、5ヶ月ぶりの再会を喜びあい、門内に入ると100人近い小学生が手に手に色布を持って一斉に「熱烈歓迎」の大合唱が沸き上がり、ここで姉妹都市調印の感激が再びよみがえってきた。代表団一行は、早速市役所を表敬訪問し、市職員の熱烈的な歓迎を受けた後、方明市長らと歓談し、まず答礼第一の目的を果たした。蘇州市滞り2日目の夜、蘇州飯店劇場で市民歓迎大会が催され、市各界代表からなる男女500人余が会場の席を埋めた。答礼訪問最大の行事であり、席上方明市長梅村人民代表大会常務委員会主任の歓迎のことは、両市間の記念品の交換、江蘇省昆劇団の伝統芸能の舞踊などが行われ、会場に参集した市民にも両市間の友好を深く心に刻んだようだった。また末永い交流のシンボルとして、東園に泰山木二本の記念植樹を行ったほか、方明市長白らの案内により網師園、拙政園の庭園や名勝寒山寺、虎丘、長青人民公社、蘇州中学校、刺しゅう研究所、東興絹織物工場など、各分野の施設を見学し「多くの市民と友好交流できる機会」を要望していた我々の所期の目的が達成された。翌朝、水の都蘇州市を後に各地を表敬訪問するため、蘇州駅頭で方明市長らの温かい見送りを受け、南京市へ向け出発した。南京到着後、直ちに省政府を表敬訪問し、汪冰石副省長ら幹部3人に会い蘇州市との姉妹都市締結への協力を感謝し、中国の偉大な革命の先駆者、孫文の陵墓、中山陵、名勝玄武湖などを見学し、友好を深めながら深夜の南京駅を後に北京への1157キロメートル、15時間の旅へと出発した。途中、新中国が自力で架橋を成し遂げた全長6772メートルの南京長江大橋を渡り、列車は平原をひた走りに北上を続けた。見渡す限りの田園風景が窓外に広がり、改めて中国の広大さに驚きながら、途中通過する駅や駅付近の風景、人々のゆききを楽しみながら午後2時北京に到着した。北京駅頭では、政府関係者の温かい出迎えを受けた後、中日友好協会に孫平化副会長を、中国国際貿易促進委員会に楊国光顧問を表敬訪問し、さきの中国展での協りに感謝の意を表わし歓談したほか、天安門広場、万里の長城、故宮などを見学し、答礼訪問の旅をほぼ終えた代表団一行は、中国民航機で北京空港から最後の訪問地、上海空港に着陸した。空港には趙祖康副市長ら市人民政府関係者の手厚い歓迎を受けた後、黄甫公円、孫文旧居、魯迅旧居など市内施設を見学し、友好を深め機上の人となった。今回の答礼訪問を終えて、訪問先での熱烈的な歓迎に感謝しながら友好のあかしとして確認された両市間の農業、工業、医学、文化、スポーツなど各分野での交流計画を実現するとともに、末永い交流を続けてまいりたい。なお、代表団一行に最後まで同行し、お世話いただいた蘇州市外事弁公室の呉増璞主任、張学同室科員に心から感謝の意を表したい。

○編集後記

昨年は蘇州に始まり蘇州に追いかけられたと言っても過言ではないと思う。各都市との交流事業も広範囲にわたってあったが、やはり最大の行事は6月の蘇州市との調印で、百万石まつりの最中ということもあり訪問団滞在中はお祭り気分、友好ムード一色で、受入側としては大変であったが無事池田市に引き継いだ時はホッとしたものだ。一行滞在中御協力を賜ったすべての方々に、ここに感謝しその労をねぎらいたい。また調印を境に金沢からの訪蘇団がせきを切ったように多く、蘇州市側の受入れも大変であろうかと察する。